

助産学専攻科の授業評価結果に対する考察（平成 25 年度）

助産学専攻科長 坂本 すが

1. 授業評価に関して

- ① 助産学専攻科の科目全体において、総合評価は 4.0 以上の評価でした。学生が自ら評価する意欲的に授業に出席したかどうかの項目では、学生の出席率が高い点になっていました。学生にとってより重要である「授業内容がよく理解できたか」という評価も同様で安心しました。
- ② 幅広い知識や技術を得るために、医師や多分野の講師による授業展開、また、授業の一環としてセミナーや学会に参加することなどを盛り込むことで周産期医療の最新の動きを理解することに繋がっていると考えました。なお、日本分娩監視研究会（注）に学生は全員出席しており、最先端の臨床の分娩監視の実際に触れ、大きな学びとともに臨地実習での活用に関わっております。

（注）日本分娩監視研究会は、故 橋本武次博士が中心となって設立された研究会。研究会は年 2 回開催され、「教えたり、教えられたり」をモットーに、CTG(Cardio Toco Gram: 胎児心拍陣痛図)を中心に分娩管理について研究(勉強)する会。

2. 授業において工夫した点について

- ① 授業等では、授業と演習科目の連動を意識し、進行状況に合わせて具体的な支援方法について教員間で予め詳細にすり合わせをして授業に望むことを継続しました。
- ② 演習形式の授業は、学生の理解度が図れるように複数の教員が対応しました。
- ③ 授業ごとに学生の意見、感想を聞き、それを資料などに反映させました。
- ④ 学生の実践力を高めるために、シナリオディベートなどを導入して、実践の中から学生の聞く力や伝える力、考える力などの育成に反映させました。

3. 今後の授業や実習について

- 授業や実習の評価を分析し、教員間での授業や実習などの教育目標や指導方針を十分に共有してよい授業や教育が行えるように発展させていきます。
- 教員の姿勢については高い評価をいただきました。今後も学生が授業を理解し、意欲が持てるように、更に分かる授業を目指していきます。

4. 学生に対して

- 教員は学生が将来において問題を抱えたとき、自ら考え行動できる能力を培える教育を探求し、実行していきたいと思っています。
- 助産学専攻科においては、大学を卒業した後、すでに看護師及び保健師の国家試験に合格し、国家資格を持った方々を対象として、助産師を育成

しております。助産学の修得には、大変な分娩介助実習等の壁を越えなければいけません。そのためにも学生の皆さんには学びに対して自立した姿勢が求められます。一緒に頑張っていきましょう。

- 今後も、助産師として学生が自ら考え行動できる能力を培える教育を探求していきたいと思っています。